

### 3.4. 基礎技能系 Can-do リスト 2021

#### 3.4.1. 目的

基礎技能系 Can-do リスト 2021（以下、基礎技能系 Can-do リスト）作成の大目的は、スローラーナー（slow learner）に対する効果的な日本語プログラムを開発することである。より具体的には、限られた時間の中で、これまで積み上げ損ねた日本語を再構成し、意欲さえあれば自分で学び続けていける自律学修力をつけるまでにすることである。そのために、教授項目を厳選し、重要で身につけるべきことは異なる角度から複数の科目で意図的に扱い、関連づける力を育成し、定着力を高めることをまずは試みることにした。これを可能にするためには、他のレベル以上に、横のアーティキュレーションを効果的に強化することが必要であると同時に、そのための教材が必要となる。この教材作成が中目的となる。教材を効果的に生かすためには、それぞれのシラバスを効果的に組むことと、他の科目とのアーティキュレーションを効果的に設計することが必要である。その元となるのがこの基礎技能系 Can-do リストとなる。

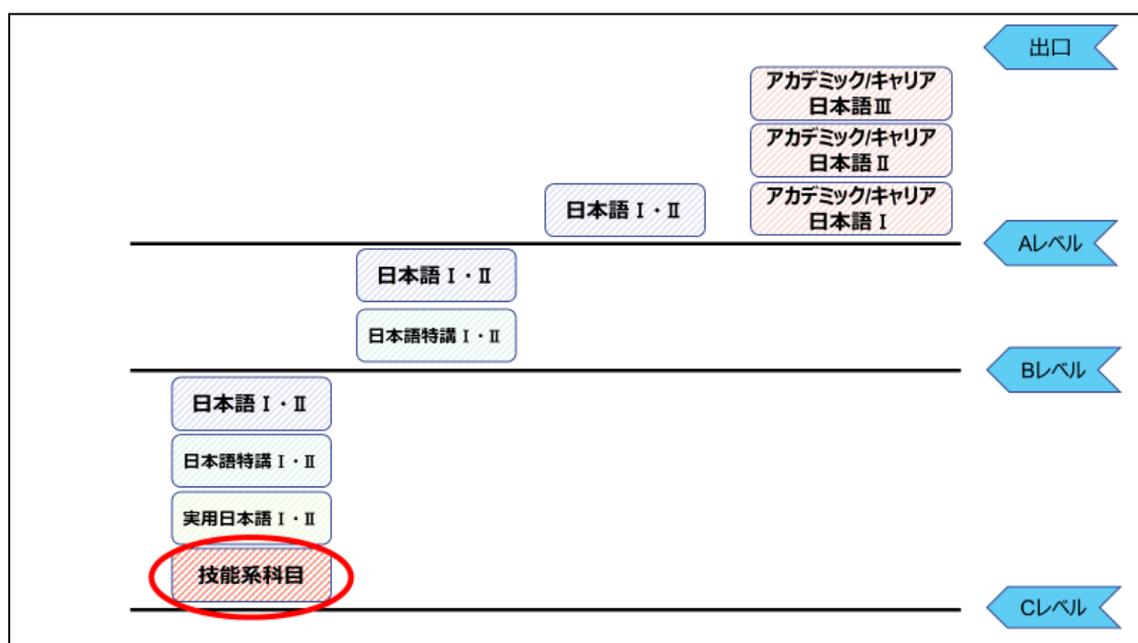


図1 技能系科目の位置づけ

図1の通り、技能系科目はCレベルの学生が履修する4つのカテゴリーのうちの1つである。他の科目とのアーティキュレーションの点からは、技能系科目によって得た「理解」を、特に日本語I、日本語特講Iで「使用」に結びつけることが重要となる。

#### 3.4.2. 作成の経緯

2020年度に新日本語カリキュラムの運用が始まったことにより、日本語カリキュラムに関する課題が、従来の履修の枠組み自体を作ることから、できた枠組みの中でそれぞれの科目内容をよりよいものに洗練化することへとシフトした。科目の洗練化を目指す中でま

ず取り組んだのが、アーティキュレーション（第2章参照）を意識した科目内容の調整である。日本語科目では、A、B、Cレベルという縦のアーティキュレーションと、例えばBレベルの学生が履修する科目である「日本語」と「日本語特講」、また他の選択科目も含めた横並び、つまり横のアーティキュレーションが存在する。この縦横のアーティキュレーションを整えることが、効果的なカリキュラム運用において重要であると考えた。この課題に取り組むための出発点として、まずは各授業で何を目指し、何をしているかを可視化し共有することを目的に、全授業に関し、常勤教員が、それぞれ担当する授業で目指している活動内容をいくつかの項目にまとめ、各項目の詳細を Can-do statements の形で整理し、共有した（2019年度末から2020年度初めにかけて）。表1は、最初のたたき台として報告者が示した「キャリア日本語」の例である。

表1 科目別 Can-do リスト 2020「キャリア日本語」の例

- |  |
|--|
| <p>1. キャリアについて深く考える。→ 自分自身のキャリアイメージを持つ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 情報収集ができる（読む/聞く、考える、調べる⇒リサーチ力）</li> <li><input type="checkbox"/> 収集した情報をまとめることができる（統合力）</li> <li><input type="checkbox"/> まとめたものを他者に伝えることができる（表現力）</li> <li><input type="checkbox"/> 他者の発言に対し、適切に質問・コメント・確認・同意表明・反対表明等を行うことができる<br/>(ディスカッション力)</li> <li><input type="checkbox"/> 他者とのやり取りの中で、適切な表現を用いながら考えを深めあうことができる<br/>(関係調整・構築力)</li> <li><input type="checkbox"/> 内省をすることができる（自己対象化力）</li> </ul> <p>2. キャリアイメージの中で、必要となる能力を特定し、自覚する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 自分にとって必要な能力をリスト化できる（目標特定力）</li> </ul> <p>3. 必要な能力を身に着けるための、具体的な方法を検討し、実践する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 自分の現在の能力を適切に判断・評価できる（自己分析力）</li> <li><input type="checkbox"/> 実行可能な計画を立てることができる（計画力 P）</li> <li><input type="checkbox"/> 自己管理のもと、計画を実施することができる（自己管理力 D）</li> <li><input type="checkbox"/> 計画実施プロセス及び到達度を評価することができる（自己評価力 C）</li> <li><input type="checkbox"/> 計画実施を反省的に振り返り、改善策を考えることができる（循環推進力 A）</li> </ul> <p>4. 特定強化日本語能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 使い分け：適切な日本語を、場面や目的、対象者に応じ、切り替えて使用することができる</li> <li><input type="checkbox"/> 待遇表現：敬語や授受表現が、適切に使用できる</li> </ul> |
|--|

これら、科目内容を項目別にまとめ、各項目の詳細を Can-do statements を用いて記述したリストを「科目別 Can-do リスト 2020」と呼ぶこととする。この科目別 Can-do リスト 2020 は、2020年度新任常勤教員2名が新鮮な目で確認し、それぞれの科目に対してフィードバックを行い（2022年5月）、全体で共有するという過程を経て終了した。

基礎技能系 Can-do リストは、この科目別 Can-do リスト 2020 における「日本語文法」「日本語コミュニケーション」「日本語語彙」をベースとし、他の科目とのアーティキュレーションを意識し、報告者がまとめたものを、プロジェクトメンバー間で精査したもので

ある。

### 3.4.3. Can-do リスト

以下、日本語文法、日本語コミュニケーション、日本語語彙の順に、基礎技能系 Can-do リストを示す。日本語文法リストの「文法（項目案）」は、報告者が必要と判断した文法項目で、授業担当者にどのように扱うか検討を依頼したものである。

次に、この基礎技能系 Can-do リストを、基礎技能系授業担当コーディネーターが、授業担当教員たちとどのように 2022 年度のシラバス及びルーブリックに反映させたかを報告する。

#### 基礎技能系 Can-do リスト 2021

| 日本語文法 |   |
|-------|---|
| 1     | 授業項目の文法的概念が理解できる。                       |
| 2     | 文法的理解を使用に関連付けることができる。                   |
| 3     | 自身の日本語使用における文法的正誤に注意を払うことができる。          |
| 4     | 自身の日本語使用における文法的正誤を判断し、誤った場合に修正することができる。 |
| 5     | 周囲のリソースを効果的に活用することができる。                 |
| (1)   | 【文法（項目案）】て形                             |
| (2)   | 【文法（項目案）】話し言葉におけるスタイルの違い（フォーマルとカジュアル）   |
| (3)   | 【文法（項目案）】話し言葉と書き言葉の違い                   |
| (4)   | 【文法（項目案）】名詞修飾と基本的活用（動詞、形容詞、名詞）          |
| (5)   | 【文法（項目案）】助詞＋自動詞/他動詞                     |
| (6)   | 【文法（項目案）】助詞＋授受表現                        |
| (7)   | 【文法（項目案）】様々な依頼表現に用いる形式                  |
| (8)   | 【文法（項目案）】複文                             |
| (9)   | 【文法（項目案）】接続詞とマーカー                       |

## 日本語コミュニケーション

|    |   |
|----|---|
| 1  | 教員やクラスメートの発話に傾聴することができる。                                  |
| 2  | 発話や文章における文法的誤りが特定できる。                                     |
| 3  | 発話における発音上の問題が特定できる。                                       |
| 4  | 発話や文章における文法的誤りを修正することができる。                                |
| 5  | 自分の発話における発音上の問題を修正することができる。                               |
| 6  | 場面や相手との関係に応じたスタイルの使い分けが必要であることを理解できる。                     |
| 7  | この場面でこの相手とどのようなスタイルを使うべきか判断できる。                           |
| 8  | 場面や相手との関係に応じたスタイルの使い分けができていくかどうかを把握できる。                   |
| 9  | 場面や相手との関係に応じたスタイルの使い分けが不適切だった場合に、その場で、或いは次の機会に修正することができる。 |
| 10 | 教員との個別な対面コミュニケーションが適切に行える。                                |
| 11 | 教員へメールで適切に意志を伝えることができる。                                   |
| 12 | 発表するために必要な日本語表現の大枠が理解できる。                                 |
| 13 | 発表するために必要な日本語表現の大枠が使用できる。                                 |
| 14 | ディスカッションを行うために必要な日本語表現が理解できる。                             |
| 15 | ディスカッションを行うために必要な日本語表現が使用できる。                             |

## 日本語語彙

|   |                               |
|---|-------------------------------|
| 1 | 新しい語を自分で調べることができる。            |
| 2 | 調べた語の読み方を正確に覚えることができる。        |
| 3 | 調べた語の読み方を正確に発音することができる。       |
| 4 | 活動の中で、学んだ語を特定し意味を理解することができる。  |
| 5 | 活動の中で、学んだ語を使用してやりとりを行うことができる。 |

### 3.4.3.1. 日本語文法の 2022 年度シラバス、ループリック、教室活動への反映<sup>1)</sup>

2021 年度後期終了後に基礎技能系科目担当者による振り返りが行われた。その際、基礎技能系 Can-do リストの「文法的理解を使用に関連付けることができる」ことが不十分であったという内省が挙げられた。2021 年度には「文法的知識を活用し、適切な文章を書くことができる。」という到達目標があったが、「適切な文章」が何を示すのか曖昧であったことが使用のための授業活動へと結びつきにくかったと考えられる。これを受けて、2022 年度は「文法知識を実用的な文章の中で、適切かつ正確に使うことができる」という文言に変更し、基礎的な練習の後に大学生活で出会うであろう使用場面を想定した書くタスクを実施することとした。書く際の材料として、「周囲のリソースを効果的に活用する」ことを念頭におきインターネット上の情報を利用することを考えている。

基礎技能系 Can-do リストには、メタ認知能力を高める項目として、「自身の日本語使用における文法的正誤を判断し、誤った場合に修正することができる」が挙げられている。これまでも到達目標として「自分が書いた文章の不適切な部分に気づき、修正することができる」とあり、ループリック評価にも組み込まれており、授業活動でも学生が自分の書いた文を修正する機会はあった。しかし、系統的な指導としては組み込まれていなかった。そこで、2022 年度のシラバスでは、基礎技能系 Can-do リストに挙げられた「自身の日本語使用における文法的正誤を判断し、誤った場合に修正することができる」に到達目標の文言を修正し、教科書を誤用訂正の練習があるものに変更、毎回指導していくことを目指す。

新たに 2022 年度に扱う文法項目として基礎技能系 Can-do リストから取り入れたのが「名詞修飾」と「自動詞・他動詞」である。「名詞修飾」はこれまで名詞や形容詞・動詞の活用とともに扱っていたが、独立して扱うことで節のレベルまで産出できることを目指す。「自動詞・他動詞」は日本語学習者にとって使い分けが難しく混乱しやすい文法項目の一つとされている。大学生活においてレポートや報告書を作成する際に背景説明をする際には自動詞を、自分自身の意見・考察を表すには他動詞を正確に使いなければならない。難しいながらも、非常に重要な項目と考えられるので、取り扱うこととした。

アーティキュレーションとして、コミュニケーションとの関連付けを図り、実施回を移動させた文法項目もある。同週の後半にコミュニケーションの授業で「申し出」を扱うことに合わせ、先んじて文法知識を導入するため、9 回に使役・使役受け身を実施するように変更した。

その他、基礎技能系 Can-do リストに挙げられているがシラバスに取り上げていないものもある。文体と接続詞・マーカーは授業活動として行う書くタスクの中での指導を目指す。複文は、因果関係、条件節、引用など様々な用法を取り扱うことになり、非常に学習項目としては複雑である。前述のとおり、本学学生は様々な文法項目が習得に至ってはいないものの、既習であるため、オーソドックスなアプローチでは学習意欲が喚起されない。ゆえに、学習項目の提示の仕方には慎重でなければならない。教える上で初級とは違った見せ方をするなど教材の工夫が必要だと考えた。そこで、複文については今後の課題と考え、大学に申請した企画「留学生日本語力補強：日本語力に課題を抱える本学留学生のための教材開発」において本学の学生にあった教材を作成し、実践にまで結び付けたいと計画している。

### 3.4.3.2. 日本語コミュニケーションの2022年度シラバス、ルーブリック、教室活動への反映

2022年度シラバスを作成する際に最も大きく変更した点は、コミュニケーションの形態に関係する学習項目である。2021年度は1対1の会話のみ扱っており、発表やディスカッションのような多人数で構成されるコミュニケーション活動は行われておらず、大学生活における言語活動を十分に反映したシラバスとは言い難かった。そこで、2022年度は基礎技能系 Can-do リストの「発表」「ディスカッション」をシラバスに取り入れることとし、到達目標として「発表やディスカッションの表現の基礎を身につけ、実際に使うことができる」を設定した。授業活動としては、スピーチを2回、ディスカッションを1回設けることとした。また、基礎技能系 Can-do リストの「スタイルの使い分け」を反映させ、「大学生活において多様な人々と適切なスタイルを用いて文章および口頭でやりとりすることができる」という到達目標を設定した。これまでも待遇表現は扱っていたが、目標としては設定されていなかった。

日本語コミュニケーションにおいてメタ認知能力を高める項目としては、「発話や文章における文法的誤りが特定できる」「発話における発音上の問題が特定できる」「発話や文章における文法的誤りを修正できる」「自分の発話における発音上の問題を修正することができる」が挙げられる。これらメタ認知能力向上を目的として、「文法的誤り」や「発音上の問題」は、まとめて「発話上の問題」という表現にし、「発話上の問題を特定し、修正することができる」という到達目標を設定した。2021年度は、発音指導は系統的には行われていなかった。これも2022年度の重点項目とし、6回の発音指導の回を設けることとした。ルーブリック評価にも反映させ、このメタ的に自身の発話を見つめる力を「モニター力」として項目を設け、自分で文法や発音の問題を特定し、修正できることを最上位のレベル(S)とした。

### 3.4.3.3. 日本語語彙の2022年度シラバス、ルーブリック、教室活動への反映

2021年度は到達目標を「どのような専門分野においても共通し、高い頻度で使用される基本語彙を理解することができる」「基本語彙を文脈にあわせて適切に使用することができる」「ニュースや記事の内容を正確に理解し、自分の考えを説明できる」として、次のような活動を行っていた。事前課題として指定されたニュース教材を見て概要理解問題を解き、授業でディスカッションできるよう未知語は調べておくことになっていた。授業では、まずニュースのスク립トを学生に音読させて発音を確認してから、ディスカッション活動へと入った。このニュースを聞いて理解し、言葉を調べ、発音を確認、そしてディスカッションをするという一連の活動において、基礎技能系 Can-do リストの「新しい語を自分で調べることができる」「調べた語の読み方を正確に発音することができる」「活動の中で、学んだ語を特定し意味を理解することができる」「活動の中で、学んだ語を使用してやりとりを行うことができる」については、すでに実践されていたといえる。このように基礎技能系 Can-do リストに照合して振り返った際、「調べた語彙の読み方を正確に覚えることができる」点が課題として残されていることが明らかとなった。また、調べた語の読み方も、その語の意味も「覚える」段階まで引き上げることができていなかった。そこで、2022年度は到達目

標の一つに「知らない語にであった時、その語の読み方、意味、発音を調べ、習得することができる」を掲げ、明示的に「覚える」段階まで到達することを示した。授業でも「覚える」段階のタスクを実施することを計画している。その他に、これまでどおり語を文脈から切り離さずに意味・用法を理解し、使用レベルにまで到達することを目指し、「活動の中で学んだ語を特定し、その文脈での意味・用法を理解することができる」と「活動の中で学んだ語を使用して、やりとりすることができる」という到達目標を設定し、より理解から使用レベルにまで語彙知識を引き上げることを明確にした。この到達目標に合わせ、評価ルーブリックでは、調べて覚えるまでの力を「学習能力」、意味・用法の理解を「理解力」、使用してやりとりする力を「産出力」の三つを評価項目とした。「正確に覚えること」「正確に理解すること」「適切に使用すること」を最上位のレベル（S）とした。

#### 3.4.4. 共有対象及び今後の展開構想

基礎技能系 Can-do リストの共有対象は、日本語担当教員と、外部教材作成担当者が中心となる。日本語担当教員との共有においては、シラバスと評価ルーブリック作成まで進んでいるので、次年度は PDCA サイクルの D→C→A と回すこととなる。また、次年度計画されている B・C レベルの日本語 I・II 及び日本語特講 I・II の Can-do リストを作成する際のアーティキュレーション上の一起点となる。

教材化については、委託内容の可視化と共有のために基礎技能系 Can-do リストが機能する。但し、教材は、教授項目の説明だけではなく、教室活動も含むため、今後の課題として基礎技能系 Can-do リストで示したことができるようになるための効果的な教室活動の開発があげられる。

#### 注

- 1) 詳細は巻末資料を参照されたい。

文責：齊藤真美

徳田恵（3.4.3.1, 3.4.3.2, 3.4.3.3）